茅野市の博物館・文化財課だより　No.15 1996.12.25

八ヶ岳通信

尖石考古館

特別展『縄文のビーナスたち』好評のうちに幕

尖石考古館所蔵の米沢棚畑遺跡出土の土偶（愛称「縄文のビーナス」）が国宝に指定されたのを記念して行われた特別展『縄文のビーナスたち』が4月27日から5月19日まで開催され、連日多くの入館者を迎えることができました。

特別展には県内をはじめ、東日本を中心とした土偶や土器を多数借り受け、当館所蔵資料と共に展示を行いました。借用した資料の中には、国の重要文化財6件14点、重要美術品2点、長野県宝1点も含まれます。

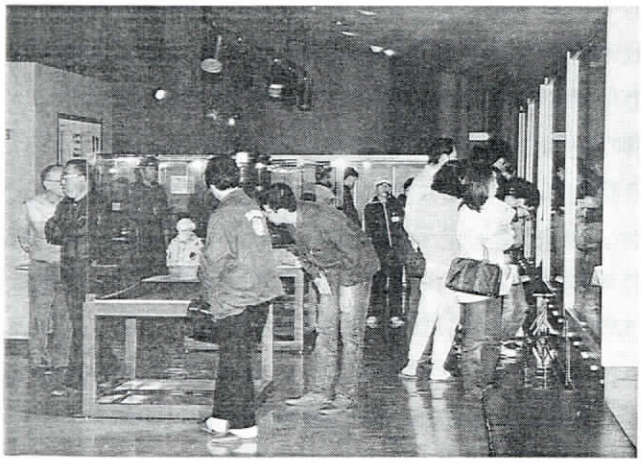
展示品は、縄文時代前期の板状土偶、縄文時代後期に関東地方東部を中心に出土する山形土偶、縄文時代晩期に東北地方を中心に出土する遮光器土偶、顔面把手付土器や釣手土器など、日頃一堂に会することのないものばかりで、市民をはじめ、県内外から多くの来場を得ました。

期間中は、市民に無料で公開したほか、郡内の小・中学校にも減免処置を取るなど、全国の土偶を多くの方々に見てもらうことを目的に開催しました。

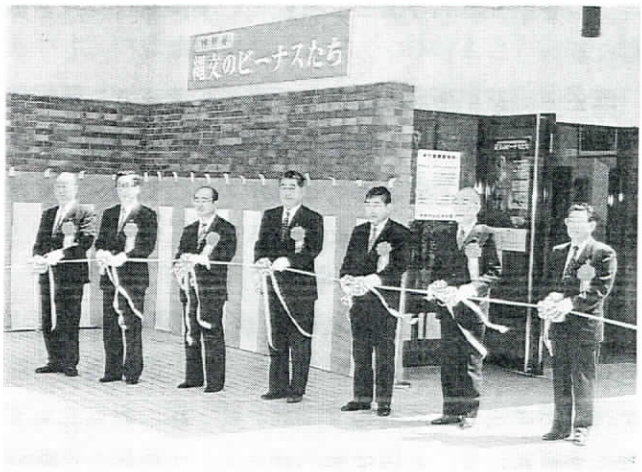
この特別展は、信毎文化事業財団の設立1周年の記念事業とタイアップし、（財）信毎文化事業財団・信濃毎日新聞社と共催で行われました。

ゴールデン・ウィーク期間中は、例年県外から観光に訪れる人達で賑わいますが、今年の入館者は県内からの来館の多いことが特徴と言えます。

特別展期間中の総入館者は、12,000名を超えました。



熱心に見入る



多くの入館者を願いテープカット

資料を快くお貸しいただいた諸機関、後援いただいた多くの団体に感謝申し上げます。

井沢元彦氏大いに語る

この特別展にあわせ、作家の井沢元彦氏の記念講演会が、5月11日(土)茅野市民会館で開催されました。「日本人を動かすもの―和とコトダマ（言霊）の世界」の演題で約2時間、日本の文化と日本人の心、その行方について熱弁をふるわれました。

連休後の土曜日ということで、出足が心配される中、受付開始の1時間以上も前から、市内ばかりでなく県内、県外からも続々と集まり始め、700名近い聴衆が集まりました。

聴衆を魅了した井沢元彦氏の講演

平成８年度 特別展講演会
「赤彦と八ヶ岳山麓の短歌文化活動について」

講師：東洋大学名誉教授 伊 東 一 夫 先生

去る４月27日から５月19日まで、八ヶ岳総合博物館では、伊東文庫の協力により、「平成８年度特別展伊東文庫による近代短歌資料展～赤彦と八ヶ岳山麓の短歌文化活動を含めて～」を開催しました。それに伴い、伊東文庫の伊東一夫先生にご講演をいただきました。

先生は、文芸思潮を研究しておられますが、下諏訪町のご出身であり、八ヶ岳山麓の短歌文化活動についても造詣が深く、研究者の立場からお話をいただきましたので、講演の一部を紹介します。

＊

私は、八ヶ岳の西山麓地帯というものは、諏訪湖の周りの生活や文化と、少しかけ離れた、異郷のような気持ちで子供のころから「山浦（やまうら）」と、親しみをもって呼んできました。私は研究の都合上、下諏訪から諏訪市・茅野市・富士見にかけて通じている、中山道と甲州道中といった宿場街道に生まれた文芸文化を街道文化と呼び、それに対して、この山浦の八ヶ岳山麓地帯の文芸文化を、山麓文化と呼んでいます。

私たちの文化は、伝統的な面と、革新していく面との二つの面をもっています。伝統的な何も変化しないというだけのものだったら、私たちの進歩はありません。しかし、変化し、革新していく面があるからこそ、時にははずれても、たえず進歩していくのです。つまり、あらゆる存在は全てそのもとをただせば、対立した二つの相反する要素から成り立っているわけです。

街道文化と山麓文化を合わせると、諏訪の文化となります。諏訪の文化を対立的に考えるならば、この宿場街道の平坦部の文化は、非常に革新的で、どんどん移り変わっていきます。しかし、山麓地帯の文化は固定し、静的で、伝統を引き継いでいくものであり、そういう点でいえば極めて保守的で、あまり変化しないのです。この二つが適当に反発し和合しあうことによって、諏訪文化が成り立っているというのが私の考えです。これは、短歌を考える場合にも、あらゆるものが対立しているものだというふうに、その根源に対立をおいて考えていくと、はっきりしないことがはっきりして来る場合もたくさんあるわけです。

山麓地帯の短歌文化活動というものを、二つの対立的なものから考えてみます。直線性、孤立性を持つ農業生産の山岳高原地帯、直線的な川に沿って集落ができ、それから耕地がその川に沿って造成されています。八ヶ岳を見ると、鋭い直線的な、丸い蓼科山とは大変対照的に成り立っていると誰でも感じます。いわゆる直線的ということは、ある意味では理論というものを最も尊びます。信州人、特に諏訪人は理論好きだとよく言われます。理論がなければ話にならない。理論を持たない人の話なんか聞かれないといったぐあいです。そういう点から言うならば、山麓人は徹底した理論家であり、自我自尊、独裁的というか孤立的というか、自分だけを中心として生きようとする非常に強烈な自我を持っています。それが、だんだん下に下るほど弱められ、平坦部では薄められてきています。しかし、薄められてもまだ、そのなごりは残っています。というのも、その中心では、非常に孤立的で、独尊的で、激しい自我というものを持っているからです。村落は、別々に孤立しているから、その孤立を貫くだけでは生活ができません。お互いが助け合わなければ、人間は生きて行けない、協力しなければ生きられないのが人間の社会です。これは他の動物や植物も同様で、共助・共生が現代になって反省されております。

県内外の多数の方々に聴講いただいた、伊東先生の講演会

私は、この山麓地帯の人間関係や文化について、

「竹」の習性とよく似通っているのではないかと思います。竹というのは、根が縦横無尽に張っていて、隠れた土中に地下茎を持っています。そして、はげしい力で上へ上へと伸びるたくましい生命力を持つ植物です。成長しても、しっかり扶助しあっています。

私は、山麓地帯の人々の協力は、地下に潜った竹の地下茎によって、つながっていると思うのです。そこに深い繋がりがあるのです。それは、非常に細やかな、素朴な、ある面では野生的なこの人間関係が、人々をつなげているのだろうと思います。しかし各村々が、みんな孤立したそれぞれの特色を持っていながらつながっているのは、生活上のいろいろなかかわりがあるだろうと思います。その生活の中に生まれた文化活動が注目されます。

短歌と俳諧という文芸への親しみ、心の通う機会という、竹の根の営みがあったと思います。村の人たちの多くは、昼の厳しい野良仕事を終わり、夜に「座」を開いたり、農閑期の少ない隙をみて、歌を作り俳句を詠みあった。そしてみんなで思いを述べ、話し合って文芸の世界にひたり、その味を楽しんだ。いわば短歌や俳諧を通して、いろいろな村々の人たちが集まって来て、「座」を開いて楽しむ。これがひとつの縁結びとなって人間を結び付け、非常に文化的な人間関係を作っていく、この地帯の大きい特徴であり、また山浦の優れた文芸活動の特色です。

アララギ派の島木赤彦のような、大先生が茅野市で教員生活を2回もしておりますし、彼[注1]がここで生まれているという可能性もかなりあります。ここで生まれなくても、赤彦自身を育てたものは、この山麓の風土と生活であります。下諏訪ではなくて、この山麓で赤彦は育った人と見ることができます。赤彦は歌を教えるだけでなくて、豊平、玉川あたりで万葉集の講習会を開いております。あちらこちらの村々から歌や句を詠む人たちが集まってきて、赤彦の話を聞いていたようです。万葉集講義のことをとりあげると、彼は、短歌の原点（古典の伝統）に、しっかり足を据えていたわけです。このように、短歌や、俳諧文芸が、人間を教養的に結び付けて高度な文芸文化を生み出したものと考えられます。

埋蔵されていた縄文[注2]のビーナスが、美しい姿を現したように、地下に埋もれていた独特の個性を持つ、山浦の文芸文化が、その姿を次第に現して来る時が待たれます。

注1：赤彦生誕の地は、現茅野市豊平説と現諏訪市角間説がある。

注2：平成7年に国宝に指定された棚畑遺跡出土土偶

守矢史料館

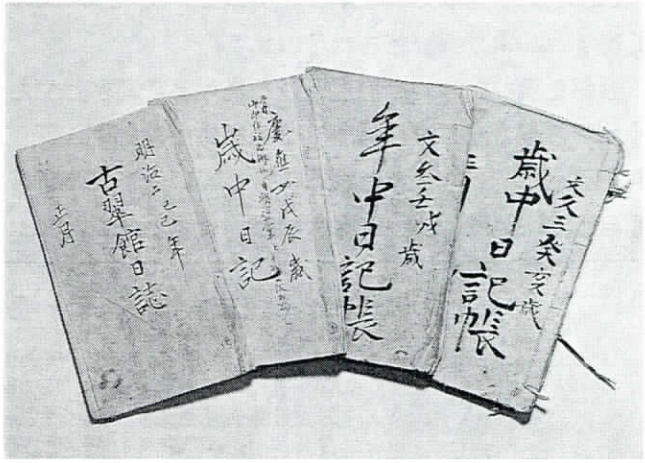
幕末維新の守矢文書

諏訪上社の神長官であった守矢家には1,700点あまりの古文書が伝来しています。このうちの155点は長野県宝に指定されています。最も古い古文書は建久3年(1192）の鎌倉時代からのものがあります。県宝に指定されている155点は少ない中世の史料として非常に貴重なものです。守矢文書は中世のものの他に多くの近世・近代のものがあります。

7月2日から8月25日まで開催しました企画展「守矢篁山」展では今まであまり公開されなかった近世・近代の史料を展示しました。守矢篁山は実名を實久といい、嘉永3年（1850）に生まれました。企画展では、篁山が書いたと考えられる慶応3年（1867）からの記録を中心に展示しました。

慶応3年の「歳中日誌」には11月11日に高部村などに「御神札」が降り、同18日に「天照皇大神之御秡」が副祝の長坂主計宅にふった記載があります。

慶応4年の「歳中日記」には、2月に「偽勅使」として弾圧された公卿の高松実村が杖突峠を越え、諏訪郡内に進軍してきた記述があります。閏4月には京都に諏訪社の神札を献上した神長官の守矢實顕（篁山の父）が帰郷し、朝廷の大政官より廃仏毀釈を命じられたことが記されています。この後、「歳中日記」には高島城に實顕らが出向いて、対応を藩の重臣たちと協議しています。廃仏毀釈が命じられたときにはすでに大政官より鑑察使の派遣が決定していたようで、21日に實顕らが高山四郎左衛門に面会し、対応を聞いたと



守矢篁山の日記

ころ、「大政官ノ鑑察使御下し二相成候而も堂塔取崩始不申候而者申訳相立兼、其上朝廷へ恐入候次第二付、明日二も取掛り申度」と述べたといいます。

「歳中日記」は10月15日で終わっていますが、同年の記録に上社の神官が宿直時に書いた「参籠所日記」というものがあります。「歳中日記」よりもかなり細かく記述されており、両史料によりかなり、幕末維新期の諏訪上社の状況が明らかになると思います。同年の記録として、「西京日誌」があります。これは明治元年（1868）11月20日から2年7月3日まで京都で神宮寺の僧の還俗について神祇官と交渉していた實顕が記したものです。神祇官とのなかなか進まない交渉の状況や、神祇官と取り交わした文書、当時の京都の状況が詳細に書かれています。

以上のように守矢文書は中世以外にも、重要な情報を現代に伝えています。

―文化財課

解明される茅野市の原始・古代 ＝平成8年度の発掘調査より＝

平成8年度の茅野市内における埋蔵文化財の発掘調査は6件を数え、多くの新たな事実が次々と発見されています。特に梨ノ木遺跡では縄文時代中期前半のムラの様子や、多くの豪華な土器が発掘されており、家下遺跡では古代の水辺におけるマツリに伴う遺物など、茅野市の歴史を探るうえに重要な資料が得られています。

梨ノ木遺跡の縄文中期のムラ

梨ノ木遺跡は東京理科短大の東方約700mにある梨ノ木配水場の南側にあります。梨ノ木遺跡は全体面積が30,000㎡ちかくに及ぶとみられる大きな遺跡です。この遺跡の調査を県営の圃場整備事業に伴い、今年の8月中旬より本格的に開始しました。今年度の調査箇所は遺跡の東側にあたる6,200㎡ですが、現在までに縄文時代の住居跡が24軒、平安時代の住居跡が2軒、この他に同時代に造られた穴がたくさんみつかっています。

縄文時代の住居は全て中期（約4,000～5,000年前）に営まれたもので、中からこの時期の土器や石器がたくさん出土しています。中でも新道式という縄文土器が多く、これが作られた4,500年程前が、このエリアの中心的な時期となっています。この他にも時期の異なる住居があり、縄文時代のムラはこの一時期だけではなく長い期間営まれています。ムラの移り変わっていく様子は、今年度以降の調査をまたねばなりませんが、新道式土器の作られた時期がムラの主体的な位置を占める遺跡は茅野市でも珍しいものです。

家下遺跡から発見された古代の導水施設

導水施設は有料道路脇の崖下から発見されました。

一般的に導水施設とは、水を一定の方向に導くとともに、適当な流速で水を流れさせる施設を言います。

発見された導水施設は素掘りの水路に、石、木樋（とい）、杭を組み合わせた水路をつなげたものです。木の樋は1本の木を削り出してつくられています。長さ2.2m以上、幅約20cm、厚さ10cm以上で、水を流すために約4cmの溝が削り出されています。

水路を流れた水は断層崖下から湧き出す清水と考えられ、崖側から西側へ傾斜する自然地形を利用して、有料道路の方向へ流す仕組みになっています。木樋の手前には石や砂を含む清水から、それらを沈めて上澄みを取り出す石組と水門がつくられています。

この施設は水田に水を引くためか、飲料水を得るためにつくられたと考えることもできますが、構造などからみてマツリに関係する施設であると考えています。

茅野市の博物館・文化財課だより　八ヶ岳通信 No. 15　発行年月日　平成8年12月25日

編集・発行　茅野市尖石考古館　〒391-02　茅野市豊平4734-132　TEL.(0266) 76-2270
茅野市八ヶ岳総合博物館　〒391-02　茅野市豊平6983番地　TEL.(0266) 73-0300
茅野市神長官守矢史料館　〒391　茅野市宮川389番地の1　TEL.(0266) 73-7567
文化財課　〒391　茅野市塚原2丁目6番1号　TEL.(0266) 72-2101
茅野市美術館　〒391　茅野市玉川500番地　TEL.(0266) 73-5440